

今年のアカデミー賞授賞式でもつともおしゃれな印象を与えた男優はといえば、胸元にフリルをあしらったドレス・シャツをのぞかせたスコットランド風タキシード姿のショーン・コネリーではなかつたか。

フリルやレースやリボンは17世紀には男性らしさのシンボルだつたこともあるとはいっていい。19世紀、20世紀を通して「女のもの」という固定観念を背負つてきた。その「フェミニンな」フリルが、コネリーの「男性らしさ」を損なうどころかむしろ引き立てていたのは、誰しも認めるところであろう。

男性のフリルの「復権」が見られるのは、セレブのフォーマル・ウエアばかりではない。昨年あたりから、ふつうの男性（といつてもどちらかといえばファッショニスタ）がスーツに合わせて着るシャツにも、フリルをあしらつたものが登場している。実はこのフリル・シャツを作るメーカーに取材したことがあるのだが、「性の越境を仕掛けるという意識はありますか?」というこちらの質問に対し、返ってきたのはこんな答え。「いや、たんすにないもの、ないもの、と探したら、フリルが目に入つたんですよ。ちょうどレディスでもフリルが人気だつたんで、いけるかな、と」21世紀の作り手は性の越境などと気負う必要がないんだー、と肩透かしをくらつた記憶がある。

CHANGING MASCULINE AND FEMININE



1920年代にシャネルは、男服の着心地のよさを振り入れながらエレガントで女らしいスタイルに仕上げて当時の新しい女性たちの支持を得た。パリオペラ座のダンサーで振付け師でもあったセルジュー・リシャルト。

変容する「男らしさ」「女らしさ」。

中野香織 文
Text: Keiko Nakano

女性服では1920年代のシャネルが展開したギャルソンヌ・ルックやパンツ・スタイル、'60年代のサンローランのタキシード・ルックや'70年代のアニー・ホール・ルックなど。男性服では'80年代にゴルティエが展開した、ピステイエやスカートといった女性服の要素

るからこそシックな価値をもつぶるまいとして公然と認められていく。いわゆる「シック・オブ・ショック」がファッショニストを動かすようになり、なかでも性差の侵犯は「ショック」の一つとしてきわめて効果が高かつたのである。



口ひげと同じく、大きなレースの衿やバフスリーブといった装飾の華美さも男らしさをアピールする要素だった17世紀の紳士と、同時代の淑女。
[A VISUAL HISTORY OF COSTUME THE SEVENTEENTH CENTURY] (Drama Book Publishers) より。



を取り入れた「オム・オブ・ジエ(見られる男)」スタイル。「性差を越える試み」としてファッション史に燐然と輝くこれらのスタイルは、

今あらためて眺めると、アンドロジナス(両性具有的)というよりもむしろ、異性の影をちらつかせることで女性らしさあるいは男性らしさがひときわエッジ鋭く際立つて見えるスタイルである。性差侵犯のスリルが、性をあいまいにするのではなく、倒錯的に性を強調する効果を發揮している、というか。

一方、1960年代以降広がるユニセックス(性の区別がない単性)ファッションは、性を感じさせない「アセクシュアル」な存在を作るもので、両性具有ファッショントとはまた別の効果を生むが、この普及もまた性差の壁を低くする流れに貢献してきた。

そして今、あるのかないのかよくわからなくなつた性差の壁。これこ越えてスキンダルになりうるはずもなく、かつてジエンダーリンボルの幻影をまとっていたものも、「たんすにないもの」というフラットな位置づけをされるまでになつた。

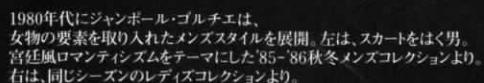
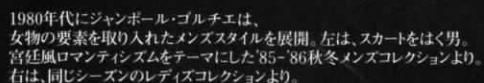
そんな時代においては「男らしさ」「女らしさ」というものも、20世紀までのようにセ

クシュアリティに直結するような湿つたものではぜんぜんなく、たんすから出し入れ可能な記号的要素になりつつある。今年の秋冬コレクションに多く見られる「レディライク」ないし「フレッシュ・クチュール」、および「ハリウッド・グラマー」と形容される女性服がまさにそうだ。レトロな女っぽさを強調しているように見えて、その実、「女度200%、なんちゃって」というカラリとしたお遊び感を漂わせているのではないか(とりわけガリアーノにそれは濃い)。りりしい女らしさを前面に出す「ダンディ・フェミニン」ないし「マ

スキュリン・フェミニン」にしても、かつてコレクションで発表される服ばかりではなく、ふつうの女の子が着る服においても同様のことが言えそうだ。今年久々にワンピースドレスがブレークしつつあるという現象、および肌の露出が年々エスカレートしているという現象は、けつして古い意味での「女らしさ」の復活を意味しないし、性的誘惑の意図とも(ほぼ)無関係である。どちらかといえば「たんすにないもの」としての、ちょっと目新しく、取り替え可能な記号としての「女っぽさ」がウケているようを見える。(これに飽きたとワンピースドレスの下にズボンをしていて「はにわ」的無性ごっこを楽しんだりもできるし)

そんな「らしさ」が新しい「ごっこ」局面に突入したかに見える時代においても、19世紀的な性差の壁を頑として守っている服もまた健在で、それがいわゆるおやじ系ビジネススーツである。こちらのほうは、フリルシャツの登場などにはもちろん目もくれず、夏の暑さも首もとの苦しさもものともせず、ひたすら大人の男の「慣習」をストイックに死守し続けている。とはいって、「袖口から10ミリのカフスを覗かせよ」とか「ズボンの裾線の高低差は18ミリに」となどといふミリ単位の厳

1950~60年代のアメリカンスタイルを体現する
左は、ジャクリーンとジョン・F・ケネディ。
右は、マニッシュなスーツ姿のイングリッド・バーグマン。
脚本「カサブランカ」(1942年)より。
第二次世界大戦下という時代の空気が、女性の服にも反映されている。



1950~60年代のアメリカンスタイルを体現する
左は、ジャクリーンとジョン・F・ケネディ。

右は、マニッシュなスーツ姿のイングリッド・バーグマン。

脚本「カサブランカ」(1942年)より。

第二次世界大戦下という時代の空気が、女性の服にも反映されている。